

また、本区域の入口は、本区域北側の博覧会協会による出展施設が高い集客力を持つと想定されることを踏まえ、当該施設の方向から入場することを前提に本区域の北西に設定する。出口は、繁忙期においても、主動線から屋外展示も含めた多くの展示体験を見込めるよう、本区域の北東に設定する。

（3）全般的な配慮事項

1) 自然環境や生物多様性の保全

本区域の既存の樹木や竹林は保全活用し、和泉川の流頭や比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）をいかした空間とする。また、本区域を含む会場区域及び周辺には、良好な谷戸生態系が残されていること等から、生物多様性の保全に配慮した施設・空間構成とする。

2) ユニバーサルデザイン

来場者、スタッフ、関係者、全ての方が安全・快適に過ごせるよう、ユニバーサルデザインの観点から、障がいの有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすい空間とする。

3) サステイナブルな設計・整備

設計や整備にあたっては、環境負荷の低減に配慮し、サステイナブルな資源利用を積極的に選択することを目指し、関係機関とも連携し、本博覧会終了後の材料の再利用など、資源循環型の建築や庭園とするための検討を行う。

4) 視線誘導の工夫

集合住宅やゴルフネットによる人工的な景観への眺望については、来場者の視線を誘導する工夫を取り入れることを大前提とし、これを補完するものとして、施設や植栽による遮蔽等で対応する。

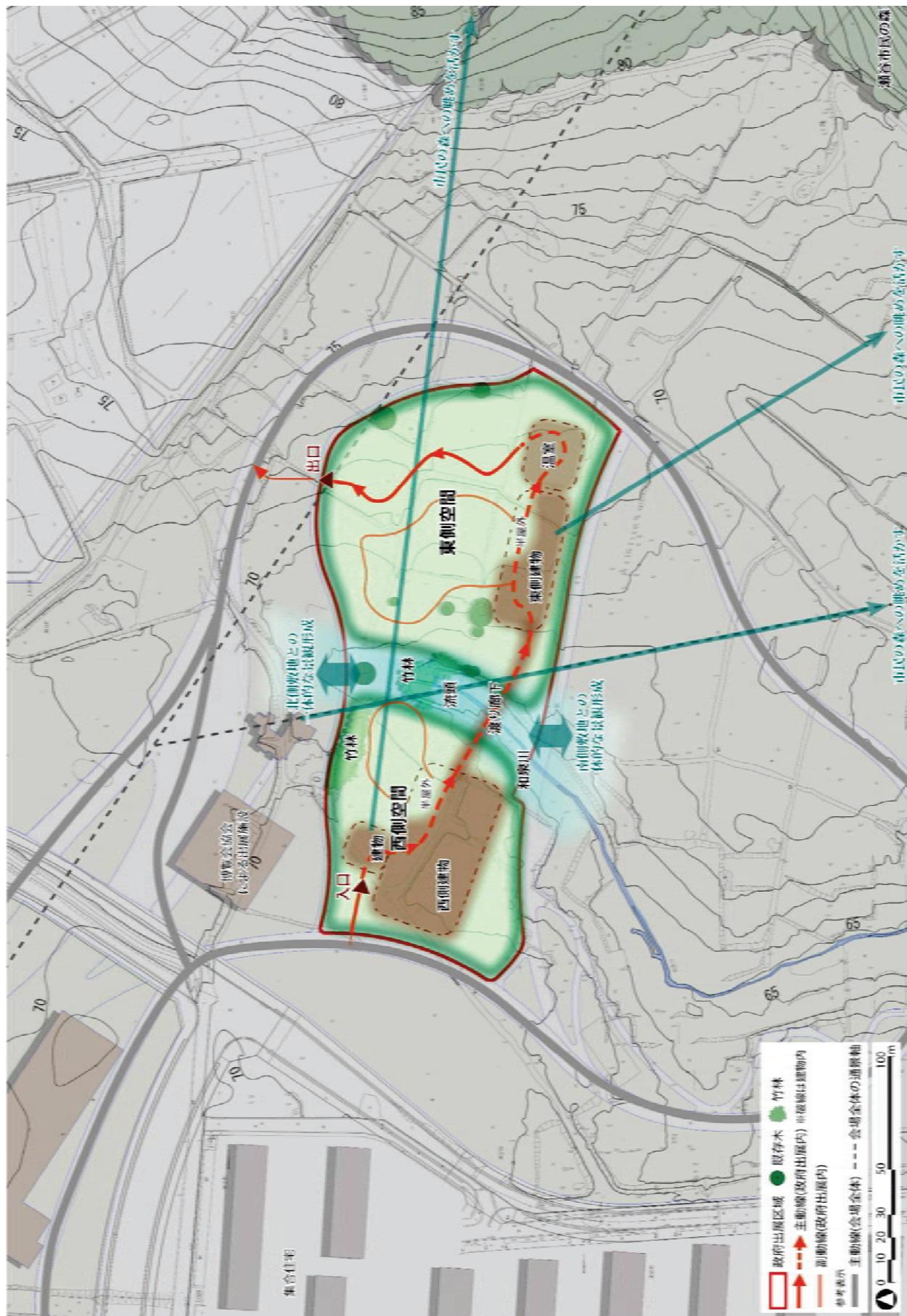


図 11 施設・空間構成の基本的方針

IV 展示計画

政府出展の理念を踏まえ、政府出展を通じて推進する政策の実現によりもたらされる、社会と暮らしの将来像を提案する展示を開く。そのため、暮らしや文化などの視点から、自然と共生してきた日本の知恵や技術を知ることで、日本の自然観を体感するとともに、現代における諸課題を認識し、持続性の観点から現代の暮らしを捉え直す展示とする。その上で、生活における空間、社会（都市）における空間、さらには、身近な空間から離れた自然環境における空間のそれぞれについて、どのような社会と暮らしを目指すことができるか、その将来像の提案を通じ、来場者自らがなすべきことを探求し、実践することを促す展示とする（図12）。

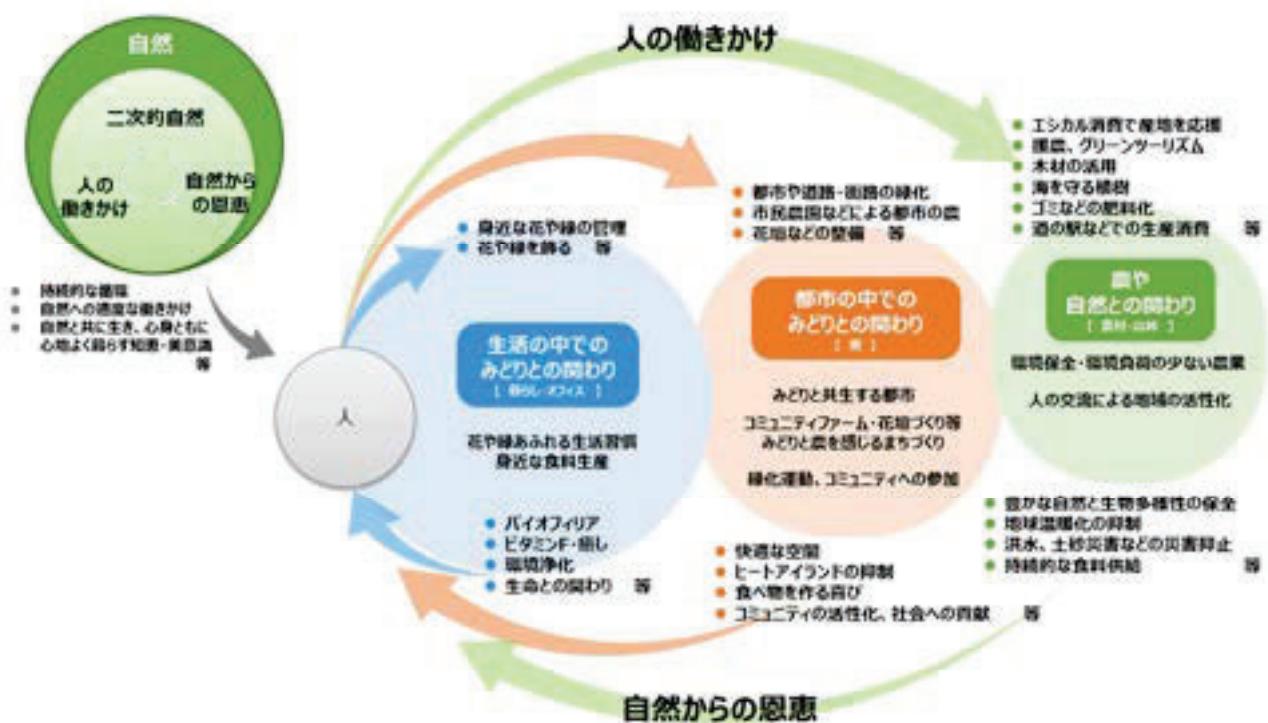


図12 政府出展で示す明日の社会と暮らし(みどりと関わる3つの環)

～みどりとの共生を新たな形で構築する～

1 展示フロー

政府出展の理念及び施設・空間計画を踏まえ、和泉川の流頭を境として、大きく西側空間と東側空間で展示を構成する（表1）。

①西側空間では、植物が果たす多様な機能や植物との共生で培われた知恵・技術に触れ、日本の自然観を見つめ直すことで、明日の社会と暮らしに向けたヒントを得る展示を検討する。また、明日の社会と暮らしを考える上での、現代の諸課題を自身の生活に重ねるような展示とする。

②東側空間では、古来受け継がれてきた知恵や、新たな知識、技術を踏まえ、明日の社会と暮らしを提案する展示とする。

以上により、現代における新たなみどりとの共生の実現に向け、暮らしの中のみどりの重要性に気付き、日本の将来像の理解と、個々の身近な暮らしにおける行動変容を促す。

表1 出展全体の展示フロー

空間構成	展示フロー	目的
西側空間	入口	<ul style="list-style-type: none">・生花を活用した展示で来場者を歓迎する。・市民の森への眺めをいかした庭園を一望し、屋外展示への期待、みどりの美しさ・雄大さを体感する。
	日本の自然観	<ul style="list-style-type: none">・植物の仕組みや力、バイオフィリアを感じつつ、日本の伝統文化・技術や、自然と共にある暮らし・文化などから植物と共生する知恵への気づきを得る。
	日本と世界を取り巻く課題	<ul style="list-style-type: none">・気候変動や生物多様性の損失、食料供給の持続性などの現在直面する課題を自身の暮らしに重ねる。
東側空間	明日の社会と暮らし	<ul style="list-style-type: none">・生物多様性の保全・持続的な利用、防災など、持続性の確保のために自然環境が有する多様な機能を活用したグリーンインフラが重要であることを体感する。・ウェルビーイングに向け、社会や暮らしにみどりを取り入れる重要性を、花・緑を取り入れた室内空間（バイオフィリックデザイン）や特殊緑化空間で体感する。・自然の力の活用と、スマート農業が融合した未来の農の可能性を知る。・庭園内に菜園を設置し、農と触れ合うとともに、生産から生活、そして生存を問う場とする。
	出口	<ul style="list-style-type: none">・各地の花でお見送りする。

2 展示手法

屋内外の展示全体として、ストーリー性や展示のまとまりに留意しつつも、来場者がそれぞれの意思で自由に回遊することを通じ、来場者に展示の意図を身近に感じてもらえるような展示を目指す。その際、体験型の展示も含め五感を刺激する展示を行い、展示の背景にあるものも伝え、多様な気づきや探求のきっかけを得られる展示を目指す。

デジタル技術については、現実では体感できないスケール感等を表現する上で効果的な手法であることから、積極的な活用を検討する。その際、デジタル技術を単なる演出手法に留めることなく、植物を主役としながらも、展示を補完し、より魅力的に伝えられるような手法を検討する。また、暮らしの中で自然とデジタルが共存できるような効果的な活用も検討する。

3 展示のターゲット

これから社会と暮らしを担う、子供から20代の若年層を重要なターゲットとして捉え、これらの世代に訴求する展示を検討する。

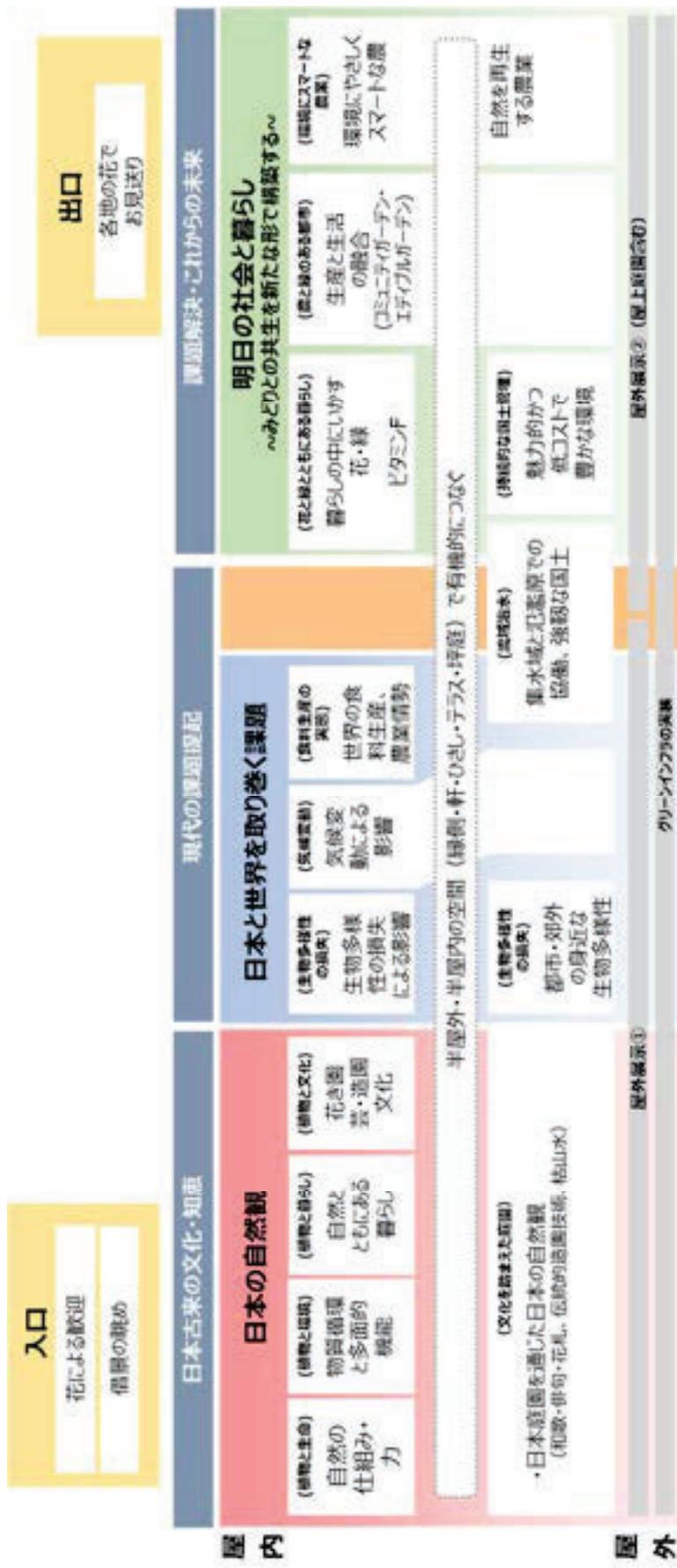


図 13 出展全体の展示フロー

4 展示の構成

(1) 屋内の展示構成等

区分	目的	展示例
入口	花による歓迎 ・花本来の魅力で来場者を歓迎する。	大型のフラワーアレンジメント、いけばな等
1. 日本の自然観	植物と生命 ・植物の生態や繁殖の仕組み等の自然科学の基礎知識を理解し、植物の利用方法を学ぶ。	【植物の巨大模型】 ・植物の内部構造や受粉の仕組みを探求できる展示 【植物知識】 ・多様な植物の生態や花の形状、色、香りなどの遺伝の仕組みを学べる展示
	植物と環境 ・自然と共に共生した農林業は、地域の環境保全、災害防止、生物多様性の増進など、単に食料生産にとどまらない様々な効用があることに理解を深める。	【二次的自然の機能】 ・水田の洪水防止、防風林など農業の多面的機能に関する展示
	植物と暮らし ・自然に人が適切に関与（知恵・技術）することで、持続可能な自然の恩恵が得られるに理解を深める。 ・自然の恩恵が、様々な地域の文化・伝統を育んできたことに理解を深める。	【里山における循環機能】 ・人が関与して形成された二次的自然、自然・生物の力を活かす知恵、食料・資源循環モデルの展示 ・茅場や薪炭など入会地と里の暮らしの関係を説明する展示 【地域文化と植物の関係】 ・植物や食等を核に、日本各地の様々な伝統文化の成立と自然との関係を説明する展示
	植物と文化 ・いけばなや盆栽などの花き文化や詩などを通じ、日本人が示そうとした生命、自然観、美意識など日本人の感性を体感する。	【いけばなの世界】 ・いけばなの成立過程を追いながら、表現しようとした世界観や審美を説明する展示 ・いけばなの基本や様式、型などを通じ、いけばなの世界観への理解を深めるための展示 【盆栽の世界】 ・盆栽の育成過程と、盆栽が現そうとした世界観や審美を理解する展示